

# とよなか 環境



## ニュースレター

発行：豊中アジェンダ21推進会  
編集責任者：奥野 享  
事務局：豊中市生活環境部環境企画課  
〒561-8501 豊中市中桜塚3-1-1  
Tel:06-6858-2106 Fax:06-6842-2802

### 本号のハイライト

- P.1 鳴く虫観察会/ヒメボタル
- P.2~3 自然学習講座
- P.4 竹炭焼き再スタート
- P.5 産業部会・活動計画
- P.7 団体紹介・原田給食センター
- P.8 講演会・地球温暖化の現状

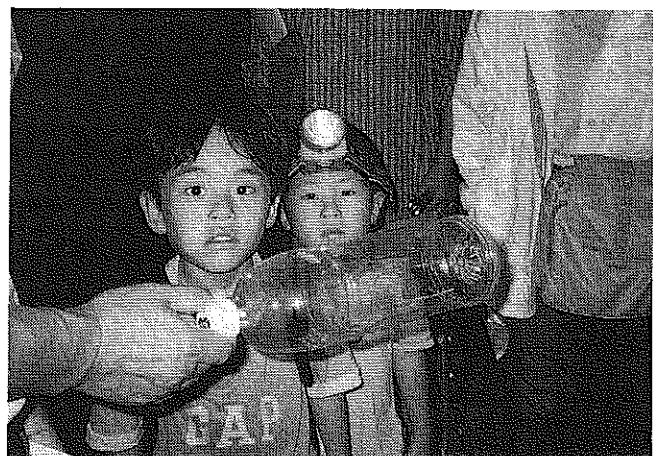
2002年(平成14年)12月号 NO.1 (通巻第19号)

## 自然部会・鳴く虫観察会

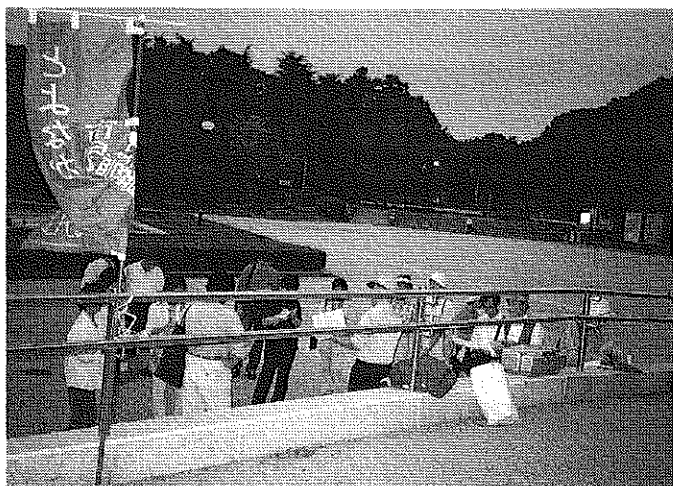
日時：9月13日 18時~20時  
場所：服部緑地公園  
参加者：大人20名、子ども11名

捕虫網を持った子ども達に囲まれて賑やかな虫取り隊の出発。静かに虫の声に耳を傾けたい大人グループは講師の先生を中心に二組に分かれて観察。

西の空に陽が沈むと緑地公園は鳴く虫の天国です。低い草地で可憐に鳴くシバズ、マダラスズ。膝までくらの草原にはエンマコオロギ、ミツカドコオロギ、ハラオカメコオロギが謳い。高い樹の上ではアオマツ



住む環境が変わると飼うのは難しいから逃がしてやりたい派、に分かれるが「飼いたい人は一匹だけ持ち帰ってよらしい」という講師の先生の声で納得。すっかり暗くなった公園の広場で解散した。(桑島いつ枝)



ムシ、カネタタキ、カンタンなどが声を競い合っている。間にクツワムシ、スズムシ、マツムシも割り込んで秋の夜を彩る。

講師の先生に、声の主の名を教えてくださいながら静寂の中でじーっと耳を傾けていると、鳴く虫が謳歌できる緑の環境の大切さをひしひしと感じた。

二時間余りが瞬間に過ぎ、集合場所に戻ったところで三組が合流し、ここ5、6年の観察データと比べながら鳴き声を聞き取れた虫、捕まえることのできた虫を確認し合った。さて、「捕虫網で捕まえた虫」はどうするか？ 子ども達は家に持ち帰って飼いたい派、

## 人里に住むヒメボタル

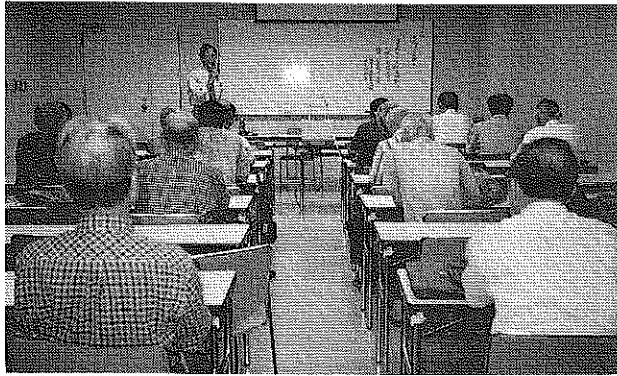
20年前には豊中のあちこちにいたヒメボタルが今では「幻」？ いいえ、春日町3丁目にまだ僅かですが残っています。10年前からヒメボタル保護の為「保全区域」の指定、専門家による調査等、ヒメボタルの保護に取り組んできました。

今回9月13日保全区域の一部の草刈をしました。草刈と言っても40cm位の高さ(虫達の環境を変えない程度)です。人目には雑然と見えても虫や他の生物にとっては住み心地のいい所。それが人里なのです。

ゲンジやヘイケは幼虫が水中で生活しますが、ヒメボタルは陸生の巻貝を食べ一陸上で過ごします。それにメスは後ろ羽が退化して飛べないので余り遠くまで移動出来ません。ヒメボタルが生息する所はまだ自然が残っている証拠です。これからも市民の財産として保護して行きたいと思っておりますが、自然を守ることの難しさを感じます。(那須野素子)

## 自然学習講座・第1回「調査活動は自然を守る」 講師：布谷知夫

豊中市史自然編の発刊を記念して始められた自然学習講座も10回目となり、今年度の第1回は9月14日に滋賀県立琵琶湖博物館研究部長の布谷知夫さんをお招きして「市民による調査活動が地域の自



然を守る」というテーマで行なわれました。

講演では市民が参加してやりがいを感じる調査のあり方を話されました。地域の人々が身近に生きている生物を調べることは、地域の環境を知る事であり、それは自然を守ることにつながるということで

す。自分たちで地域の自然の状態を監視することが目的となります。タンポポ調査はその先がけとなりましたが、調査に参加した人たちは結果を見ることによって次第に参加意識が高まり、次は何だろう、次も挑戦してみようという気持ちを盛り上げるのに最適だったわけです。

また、地域の水利用の来歴を人々から聞き取りスケッチや写真に残す水環境カルテ作りや、子どもと一緒に大人が経験したことなどを聞き出し、昔の水辺の遊びや水辺と人々との関わりを調べたことなどを紹介していただきました。

市民による調査は、素人であるからこそできるような調査で、自然や暮らしの成り立ちと関連して、多くの人々に地元のよさを確信してもらえるようにというねらいがあります。身近なフィールドでいつでも観察ができるような状態のもとで、記録を取りながら地域の自然や文化を楽しむ地元学の発展を期待したいと述べられました。(岡 恒夫)

## 企画屋本舗 第3回ちょっといい豊中見つけにいこがウォーク ～大島町、庄本町の水運と歴史を訪ねて～

実施日：2002年10月12日(土)

参加者：33名

8月17日、タイムキーパーは池田さん、ルートの確認は新聞さん、安全担当の今井さん、案内係の水野さん、当日飛入参加していただいた井下さん、カメラ担当の私、そして忘れてはいけない大御所の三好さん、それぞれが役割を分担してこの7人のスタッフで、最高気温36.7度。お盆は過ぎたものの残暑厳しくうだる暑さの中、今回の企画の現地下見を行いました。当日は本当に暑く、「午前中の涼しい内に……」と、朝9時に出発地点に集合しましたが気温はぐんぐん上がり、三好さんには「中井さんは太っていらっしやるからこたえるでしょう」と言われ、本当に倒れそうになりまし



た。しかし、この三好さんご高齢にかかわらず本当に元気で横断歩道を渡るとき信号が変わりそうになり皆で急いで渡り「三好さん早くおいでよ」と声をかけるとスタスタと走って来られたほどです。まあ元気なのは良いことなのですが、この炎天下の中、年配の方を走らす私たちもひどいものだなあと反省しておりました。こうして2時間半歩きつづけてようやく最終地点の椋橋総社に到着し、落後者もなく帰りました。

そして日を改めての準備会議では、ルートの再検討、時間配分、当日配布する資料の確認、備品、受付体制、募集要領、等々数え上げる

ときりが無いほどの細部にわたって検討と準備を行い、あとは、参加者の申込みを待つのみとなりました。当初参加者の見込みはまったく立っていなかったので※

## 自然学習講座・第2回「昆虫から自然を学ぶ」 講師：川副昭人

### ～次世代へのメッセージ～

人間と他の生物にとって、多様性の維持と環境がなぜ大事な問題なのか。記録されている動物群(132万種)のうち、約70～80%が昆虫であり、その世界を通じて判りやすくお話をいただいた。

#### (1) 昆虫繁栄の不思議

毒のある蝶(カバマダラ)を小鳥は食べないので、その羽の模様を似せている蝶達(ツマグロヒョウモンなど)。木の葉っぱそっくりの模様を持っているコノハチョウ等、擬態の精巧さと不思議さ。人間の感覚では理解できないゴマシジミ(蝶)の幼虫の子育て方法。頭だけでなく腹の先にも目[人間の感覚でいう目ではない(光受容器)：図参照]があって、確実に卵を産みつけるアゲハチョウ。子孫を残すための仕組みなど、地球環境に最も適応し繁栄した昆虫たち。

#### (2) 微妙なバランスによって、保たれている

##### 地球大気の現状とCO<sub>2</sub>の増加

人間だけのエゴと繁栄によってもたらされた地球破壊の現状を、各種のデータで分析し、過去からの大気の推移と地球全体の危機。

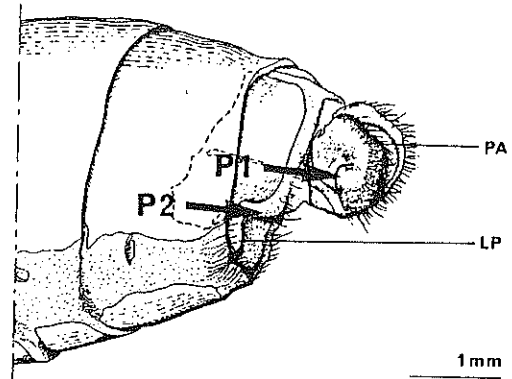
#### (3) 一つの共通祖先から出た30億年の歴史を持つ無数の生物(人間も)の保全と保護

今期の間氷期(氷河期と氷河期の間の温暖期間)開

始以来(約2万1千年前)、地球史上かつてない、人間の手による生物の急速かつ大量の殺戮と絶滅の現状を救う鍵は、地球の環境に最も適応し繁栄した昆虫の生態を知り、学ぶことにあると思われる。

昆虫を手にしてその不思議を発見、その興奮を体感し、植物や他の生物を自分たちの仲間として、認識することが大切ではなかろうかと結ばれた。

なお、この講座が行なわれたのは10月26日。  
(水野辰彦)



ナミアゲハの交尾器と光受容器(蟻川謙太郎氏の論文)  
P1:P2(光受容器)原図;南山大学、江本純氏による

※不安はありましたが10月1日の受付け開始直後、すぐに定員に達し後はひたすらお断りするという複雑な心境でしたが、とりあえずは喜ばしいことと受け止め、今後どのような要素に反応し人が集まったかを検証する必要を感じております。

さて、いよいよ本番当日受付けには順調に人が集まり、天気も日本晴れ(少し暑かった)。案内の講師には地元の森本さんをお招きして、大島町、庄本町の興味深い歴史を熱く語っていただき、皆さん熱心に聞き入っておられました。又、三宅さんには野鳥に関すること、水野さんからは昆虫や植物についてお話いただき非常に充実した内容であったと思います。私のほうは所用で最後までご一緒できなかったのですが、ここまでの様子を見て大成功に終わることを確信して、一足先に失礼いたしました。

企画屋の皆さん、お疲れ様でした。

(中井 健之)

### 豊中の自然を守る活動日～島熊山編～

今年から豊中市の数少なくなった自然を守ってこうと、10月5日に島熊山で繁茂した竹の伐採や林床の整理等を行ないました。竹は繁殖力が強くすぐ高くなり、葉で林床へ当たる日光を遮ります。そのため、雑木林の竹林化が進行し、豊中で貴重な動植物の生存に多大な影響を与えています。

当日の参加者は約10名で、私だけが初心者でした。私も竹専用のノコギリをお借りして、初めて挑んだ竹はかなり太かったので、枝を払ってまとめるまでに1時間近くもかかってしまいました。それでも全体では2時間ほどで、かなりの竹を切り林床の整理ができました。慣れてくるとみんなで竹を切るのも楽しいし、林床が明るくなっていくのがうれしくなります。

こうした少しずつの活動ですが、そこから島熊山の雑木林の保護・再生につながればと願っています。

(廣田 学)

# 竹炭焼き再スタート

昨年春の竹炭焼き以来一年半ぶりに、竹炭焼きが出来る見通しとなり大変喜んでおります。ご協力頂いた行政及び自然部会の皆さまに深く感謝申し上げます。

場所は千里中央公園の野外炊さん場です。

当公園は現在竹が繁茂し、他の樹木や草花に少なからず影響を及ぼしており間伐が必要となっております。10月9日に、ここで竹切り作業を行いました。今回は小さい子ども連れの親子の参加もありました。

竹切りには今後も、市民に参加して頂き実際に竹林に入ってその感触を確かめ、同時に竹の状況を見て間伐が必要であることを認識していただこうと思っております。同日はドラム缶窯や備品道具類を、それまで預かって頂いていたクリーンランドから軽トラックで取り寄せ、公園の管理事務所に保管致しました。そして予定していた竹割りは、時間不足から繰り延べとなりましたが10月15日、無事終わることが出来ました。ご協力の皆さんありがとうございました。

差し当たりは、11月5～6日に試験焼きを予定して



おりますので、その準備に落ち度が無いよう、注意を払っているところであります。

11月の広報で竹炭焼き体験の募集を行います。今回は11月27日～28日に行ないますが、千里中央公園という事で立地条件も良く、多くの参加者が望めるのではないかと期待しております。（三宅史郎）

## 生活部会・エコライフカレンダー2003年版完成

2003年正月からのエコライフカレンダーは、ただいま製作の真っ最中。内容は「とよなか百景」からも写真を借り、私たちの街豊中のよさを見なおすきっかけづくりにしたいと企画。あわせて、豊中アジエンダ21推進会の活動も紹介する。

たとえば最初のページを飾る写真は、豊中に住んでいたなら一度は見に行きたい上新田のとんど祭り。天をも焦がす火柱が実感できるよう印刷の色に目下苦心している。

エコライフカレンダーの目的である環境家計簿については、毎年の議論の積み重ねを生かし、より利用しやすいように記入項目を電気・ガス・水道・ガソリンだけにし、一人でも多くの市民の皆さんに参加して頂きやすいようにしている。

環境家計簿というのは、私たちの日常生活で使っている電気・ガス・水道・ガソリンなどの使用で地球温暖化に影響を与えているかを、二酸化炭素の量に換算して分かるようにしているので、環境問題の基礎的な知識としても役立ちます。

また、エコライフカレンダーの環境家計簿をつけることで「家計のむだを減らすことと、地球温暖化防止に役立てることが同時にできてとてもお得」というのが生活部会からの推奨のことば。

どうぞぜひ新しい年からエコライフカレンダーを愛用し、環境家計簿にも挑戦してみてください。

（奥野 享）

「広報とよなか」11月号でも環境家計簿のモニターを募集中



生活部会では地球温暖化の原因となる二酸化炭素排出量を計算する環境家計簿10月、11月だけのモニターを呼びかけています。詳しくは「広報とよなか」11月号の27ページののっていませんが、豊中アジエンダ21推進会事務局に連絡いただければ資料を差しあげます。（奥野 享）  
生活環境部環境企画課 Tel: 6858-2127

## 産業部会・今後の土壤汚染問題で講演会を開く

産業部会は9月25日、豊中商工会議所の会議室で商工会議所の後援を得て姜永根（カン・ヨングン）さんの話を聞いた。姜さんは株式会社大周代表取締役。テーマは「今後の土壤汚染問題」。参加者60人余だった。土壤汚染対策法の制定は、規制できなかった土壤汚染地区を指定地域として都道府県が指定し、公表することによって住民の健康被害の防止、土地所有者（汚染原因者）の責任の明確化、汚染の危険度により調査範囲、調査方法のガイドラインを明確化し、汚染状況を的確に把握、適切な対策を取ることが義務化されたと説明。しかし、調査を行うのは事業者側であり適切な調査がなされるかどうか課題も残っているようだ。

次に、過去に有害化学物質を使用していた工場は、汚染の可能性が高いので、社内調査で汚染のないことの確認が重要。また客土による汚染、果樹園の農薬ねずみ駆除剤、病院の跡地（水銀汚染）、隣接事業所からの「もらい汚染」などにも注意が必要。特に汚染原因者が分からない場合は、浄化汚染対策が数千万円から億単位になる。地下水汚染があるとさらに負担はかさむ。近隣の住民不安を解消し汚染対策を進めるには、調査・対策技術の専門家として中間的な立場での「リスクコミュニケーター」により、的確で理解できる情報開示と説明を繰り返すことが重要なキーポイントとなり、その成功事例の紹介もあった。豊中市内の事例として、万博時に上新田の掘削地に汚染土が埋め立て

られた係争中の裏話を聞くこともできた。身近な問題だけに非常に強く実感させられた。

講演後の質問で「ナショナルメディエーション法」（欧米の方法）など専門的な質問や、修復終了の確認方法、調査・修復費用など、鋭い質問が相次いだ。講演時間は大幅に超過したが、得られた最新の情報は貴重なものであった。（佐川直史）

### 今年度の活動計画

#### エコオフィス活動や廃棄物リサイクル活動

- ・事例研究とコストパフォーマンス調査
- ・豊中アジェンダ21「エコオフィス実施、評価マニュアル」作成（2カ年）
- ・事業系廃棄物の学習

#### ●ISO14001セミナーなど環境情報の発信

#### ●グリーン購入の推進

- ・グリーン購入の現状と購入基準調査（2カ年）
- ・推進策と手順作成などの検討

#### ●OA用紙の機密書類リサイクルの拡大

#### ●見学会、講演会の実施

- ・緑と食品のリサイクルプラザ（11月に済）
- ・ガラスのリサイクルと製ビン工場・酒造工場見学
- ・土壤汚染と新法の講演（別項）
- ・事業系廃棄物の排出状況の学習

## 生ごみ循環と輪廻転生<sup>りんねてんしよつ</sup>

緑の街路樹などの剪定枝、給食センターの食べ残しである生ごみを燃やさないで、堆肥にする施設が「緑と食品のリサイクルプラザ」です。

4月に投入を開始した堆肥が、9月には待望の熟成が完了しました。早速、近隣の方々、循環に協力して頂く農家の方々など、市民の見学会をしました。堆肥化の講習会とともに堆肥の配付が始まりました。

名前も市民からの応募で、豊かで楽しい『豊肥（とよっぴー）』とつけられました。

人が食べた残りを堆肥にし、その堆肥が土の中で植物の栄養となり、成長した野菜を人が食べる。この自然の循環は「持続可能な社会」をつくる基盤です。確かに、堆肥を作り、使っていると、土の中の微生物が可愛くなり、頑張ると言いたくなります。この微生物のお陰で堆肥が出来、土の中にも沢山の命があるのだと思うようになります。



9月28日の講習会に、法衣姿のお坊さんが参加されました。場所は堆肥を取り出して空になった8畳程もある熟成槽の中です。その中でお坊さんの言われる輪廻転生<sup>りんねてんしよつ</sup>は、生ごみ→堆肥→植物→食べ物→生ごみ という私たちが目指している循環そのものだということになりました。一寸だけ悟りを感じたと言えるのかもかもしれません。（浅井 正）

## 中間報告書(豊中市環境報告書)まとまる

### 豊中市環境報告書 (2001年度中間報告)を読んで

昨年と同様に大冊である。が、今年は末尾が92ページだから、昨年の100ページに比べわずかに少なくなっていた。これまでのものを踏襲した構成にするこの種の報告書として当然でもあろう。しかし第1章の2001年度環境施策の実施状況と課題では、所々に「new!」印をつけているのは新しい工夫。

まず、広報記事の掲載数が前年に比して大幅に増加している。「とよなか市民環境会議の活動回数の増加にともない、広報記事は増加しています」とだけ書いてあるが、どの部分で掲載記事が増えたのか、自己評価の意味でも少しだけ気になった。(11ページ)

次の「new!」は13ページ。「2001年度から市役所全事務事業を対象に、温室効果ガス排出削減のための取り組みを進めます」とし、今後6%削減目標に向けての数量の点検を宣言している。大賛成である。この宣言に従って、各部局毎に2001年度の温室効果ガス総排出量と削減率が表になっていて一目瞭然である。なお、全体での温室効果ガス削減比率は、2000年度を基準にして1.7%減だから好成绩。

また、部局ごとの削減実績で最大は下水道部。説明を見ると「降雨量、上水道・工業用水使用量減少のため下水処理場への流入水量減少による重油・電気使用

量の減」であった。その他にも委託などに関係した温室効果ガス排出量の減が目立っていた。むしろ、消防本部のように空調を全館式から個別式へ変更したことによる削減などが大いに参考になる。

さらに、エコオフィスの取り組み状況では、電気・ガス・水道使用量、紙購入量、ガソリン・軽油の購入分がグラフになっている。それぞれ増減には理由があるだろうと思うが、紙の使用量が2000年度に比べ4%近い減少だったのに注目した。グラフではガソリンなどが、最大の削減のように見えるがこれはグラフの描き方が問題でまぎらわしい。

2002年度からプラスチック容器の分別収集を新しく実施「new!」することを予告しているが、これは来年度の報告を待つことにしよう。ただ、以前からペットボトルとトレーの回収量のグラフが出されているが、ペットボトルなどは回収の増加を上回る量の新しいボトルが流通し、そのためリサイクルが免罪符のようになったことが常識化している。これらのグラフは見ていて虚しい。要再考である。(24ページ)

最後に注文——グリーン購入やグリーンな消費者がアジェンダ21推進会でも討論されている。豊中市役所では事務用品などでグリーン購入が進んでいると聞くが、詳細な報告が欲しいところである。一般の事業所でも大いに参考になると思う。

(奥野 享)

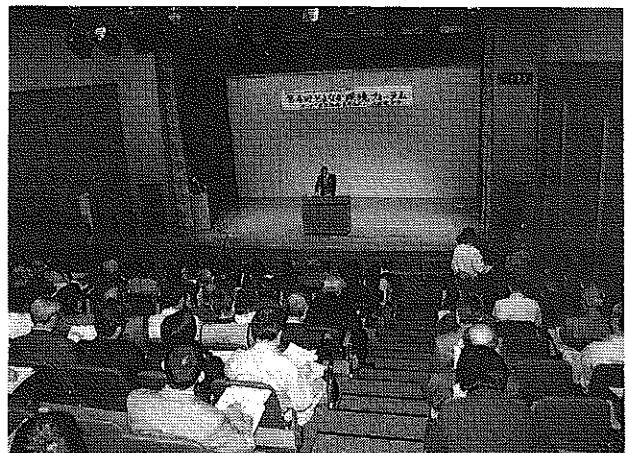
### とよなか環境フォーラムが開かれる

11月7日午後1時30分から、すてっぷホールで今年度の環境フォーラムが開かれた。フォーラムの開催は今年で第4回目であり、参加者120人。

一色貞輝市長のあいさつの後、2001年度の環境報告書については環境企画課本岡和巳課長が説明。

基調講演と続く討論のコーディネーターには高田直俊さん(大阪市大大学院工学研究科教授、豊中市環境審議会委員)が行う。今回のテーマは「資源循環・負荷低減—雨水浸透の現状と課題」であり、高田さんは「雨水浸透のあり方」について講演。

活動発表は下水道建設課長・黒岡隆さんが「雨水流出抑制策」についての行政の取り組みを説明。事業者からは都市基盤整備公団関西支社の立替土木課長・生野研一さんが「浸透工法への取り組み」の説明。市民の取り組みは、まちづくりネットワークゆの会代表理事・柳田保男さんから「雨水の貯留・



浸透に対する菟川流域の取り組み」の話があった。

テーマが技術的なものだったので討論も市民にとってはややむづかしく専門的な内容だった。

会場参加者から3人の質疑の後、最後をコーディネーター高田さんが締め括って予定の16時ちょうどに閉会した。

(奥野 享)

原田給食センターの午後1時半は戦場であった。昼の休憩を終えて出勤したトラック13台が続々戻って来る。有蓋の3トン車は給食センターのプラットホームに荷台の後部を着け、各学校に配られていた6クラス分の扉付きの運搬車を引き出す。引き出せばすぐに食器洗い場に直結している。

大小の箱型のアルミの食缶や汁物を入れていたであろう円筒形の容器、そして子どもが使ったアルミの食器



などが取り出され洗浄がはじまる。食缶が当たってガチャガチャという音、洗浄機の後部で動いているコンベアの音、ひじまでナイロン手袋に覆われている腕が喧騒の中で忙しく動く。目まぐるしい光景である。

戻ってきた搬送トラックから下ろされる食器類は大波のように洗浄場に押し寄せ、その勢いに圧倒される。おそらく、現場の班長さんの説明がなければ大事なことのほとんどを私は見落としていただろう。

洗浄機は横1列に8台並んでいる。槽の脇にネットが吊さされていて、残飯が放りこまれる。私がいちばん関心を持っていた堆肥の原料である。ネットは水切りのためである。

調理した野菜屑も、同じようなネットに入れ堆肥に廻されるのだそうだ。ネットに入れられた調理屑がごみ用の大きなバケツに入っているのを見る。バケツの中に野菜の皮などから出た水が溜まっている。話を聞くと、人参や馬鈴薯などの皮剥きは小芋を擦り合わせて皮を剥くのと同様の原理で皮を剥く機械があるのだそうだ。だからとうぜん水を使う。剥いた皮は水をいっぱい含んだ状態で出てくる。水分を搾らなければ、どろどろの状態では堆肥の発酵槽では使いにくい。

今は原田の給食センターからの堆肥原料の搬出は休

んでいるのでふつうのごみバケツだったが、原料として調理屑や残飯を出すときは、バケツの下部に排水コックを取り付けている。溜まった水はバケツが並んでいる鉄板の台の溝から、下水処理へと導かれる。清潔である。

「今年の1学期は私たちの原田給食センターから毎日堆肥の原料を出していました。食べ残し150kgと調理屑150kg、合わせて300kgまででしたが、来年は500kgがリサイクルにまわされる予定です。原田給食センターが受け持っているのは豊中市の小学校41校のうち21校、毎日つくる量は12300食。朝出勤してすぐ調理を始め、昼食に間に合わせて13台の配送車が学校に届けます」と説明を聞く。

午後の食缶や食器洗いの様子から連想して、給食を作る午前の湯気の立ちこめた、また違った戦場の光景を想像する。

原田の担当は21校だと言っても、学級数にすれば370クラス、おびただしい数である。それはまった



くの工場、聞くところでは、嘱託職員も含め61人。男女半々に作業に当たっている。

忙しい作業工程の中で、リサイクルのためにいい材料を排出するよう細心の配慮があちこちにある。揚げ物の油は3回使ったらリサイクルに出す。それが洗浄用の複合石けんになる。戻ってきた石けん入りの石油缶が並んでいる。工場裏を通ると古紙回収に出す段ボールが行儀よく畳まれ積み重ねられている。このような気配りのセンターにより、緑と食品のリサイクルプラザへの堆肥の原料供給が支えられていた。(奥野 享)

## 講演会：地球温暖化の現状・未来予測とエネルギー対策

講師：和田武教授（立命館大学産業社会学部）

2001年3月に発表されたIPCC（気候変動に関する政府間パネル）第3次報告によると、90年代はもっとも温暖な10年となり、98年はこれまでの最高気温を記録したと書かれている。この温暖化の進行を止め、20世紀初頭の二酸化炭素濃度300ppmに戻すためには、世界全体の二酸化炭素排出量を現在より60%以上も削減しなければならない。が、少なくとも京都議定書の早期発効により2010年には先進国平均5%の温室効果ガス削減を目指したいのが今の国際合意である。

だからそれだけでなく、第2、第3ステップの対策が不可欠である。日本政府が目指しているのは、総エネルギー消費の増加や化石燃料消費は削減なしで、原発の拡大と自然エネルギーの導入でクリアできると見ているのだが、全般的な立ち遅れは覆い難い。風力発電ではドイツの2%以下でしかない。

私たちは、北欧やドイツのエネルギー政策から学ぶことが必要だろう。デンマークの風力発電は住民所有の形態もあり、初めは30%の補助金で普及。今でも取り引きの価格は電気会社の85%である。再生可能エネルギーこそ住民所有に適していると言えるが、これは技術の問題よりも制度の問題であろう。

風力発電メーカーの50%はデンマークに集中している。日本に輸入すると2倍の植段になってしまう。日本はグリーン購入だけでなく、エネルギーのグリーンな生産も積極的にする必要がある。（文責：奥野）

## 編集室から

すったもんだの末、タイトルを一新し「とよなか環境」とした。取りあえぬマイナーチェンジである。慌てて作ったので、紙面構成がガタガタ。もっと格好良くしたいがそこまで手がまわらなかった。次号こそ編集内容も合わせ気分一新したものをと思っている。それがどこまで出来るか。

豊中の市民公益活動推進委員会の提言が出された。現状分析に「現在市民活動を行っている人は全体の約2割」、「今後市民活動を行いたいと考えている人は約5割」とある。テーマの順位では環境が2番目。私たちの運動に対する期待から尻を叩かれているように思った。組織が豊中アジェンダ21推進会に名を変えて半年。いまだ方向を模索しながらの疾走である。組織というのは走り出すと止まらないし、バックギアがついていない。ほんとにハンドルが大変...。（Z）

## 今後のスケジュール

### 竹炭プロジェクト

- 日時 12月14日(土)9時30分～12時30分
- 場所 千里中央公園竹林
- 内容 竹切り、竹割り  
(軍手、あればノコギリ、ナタを持参ください)

### 花と緑のネットワークとよなか・堆肥化講習会

- 日時 12月14日(土)10時30分～11時30分
- 場所 くらしかん
- 内容 家庭でできる簡単な堆肥化の方法
  
- 日時 12月19日(木)10時30分～11時30分
- 場所 緑と食品のリサイクルプラザ
- 内容 家庭でできる簡単な堆肥化の方法

### 自然部会・学習講座

- 日時 1月25日(土)14時～16時
- 場所 中央公民館
- 内容 講演会「都市計画と自然」

### 産業部会

- 日時 1月29日(水)14時～16時30分
- 場所 互惠ビル203号会議室
- 内容 事業系一般廃棄物の排出状況等について

### 交通部会・レンタサイクル

- 期間 14年11月25日～15年3月24日
- 場所 モノレール千里中央駅
- 内容 一時利用、月極利用でレンタサイクル利用者を募集中です。

\*詳しくは「広報とよなか」をご覧ください。

◎次の部会等は定例的に会議を行っています。参加を希望される方は、事務局までお問合せください。

- 自然部会 毎月第2月曜日 18時～
  - 生活部会 毎月第3土曜日 13時30分～
  - 花と緑のネットワーク 毎月第1金曜日 14時～
  - 月例会 毎月第4水曜日 19時～
- 詳しくは、事務局までお問い合わせください。

事務局：豊中市生活環境部環境企画課内

<http://www5b.biglobe.ne.jp/~toyonaka/>

Eメール [kankyooki@city.toyonaka.osaka.jp](mailto:kankyooki@city.toyonaka.osaka.jp)

《広報とよなか》

Z奥野、T浅井、M荒井、W岩瀬、P大村